

# 『心中宵庚申』

——海音『心中二ツ腹帯』との比較から見る近松の特質——

金 田 文 雄

はじめに

『心中宵庚申』は、近松の世話浄瑠璃二十四曲の最後に位置する作品である。そして、この後には時代浄瑠璃『関八州繫馬』を残すのみであり、したがって近松の最晩年の境地を示すものと言えるかもしれない。

本篇もまた、直前に起こった実事件に材をとったものであり、世話浄瑠璃によく見られる、いわゆる「際物」ということになる。題材となった事件については、土田衛氏の考証のごとく、享保七年四月六日宵庚申前夜の八百屋半兵衛、お千代夫妻による心中事件によるものである。

この事件は巷間で評判となったようであり、『外題年鑑』(宝暦版)によれば、同年の四月六日に大坂の豊竹座で、紀海音の作による『心中二ツ腹帯』が初演され、また続いて四月二十二日には、同じく大坂の竹本座で近松の『心中宵

庚申』が初演されたことになっている。<sup>(注1)</sup>もともと、横山正氏が指摘されているように、事件と同日の四月六日に『心中二ツ腹帯』が初演されることはありえず、したがって『心中二ツ腹帯』は、事件のあった四月六日から『心中宵庚申』初演の四月二十二日までのいつかであり、また少なくとも近松に先行するとの考えが妥当であろう。<sup>(注2)</sup>

ただし、この事件を豊竹座と竹本座の双方が即座に浄瑠璃に仕組むことを企画し、結果として豊竹座が先行したのか、あるいは豊竹座の初演の成功を契機に、竹本座もしくは近松が後を追う形で興行にこぎつけたのか、そのあたりの事情は定かではない。しかし、そのいづれにしても、この題材では豊竹座と竹本座が競演することになったのである。ただ、既にこれまでも指摘されているように、当時好評を博したのは豊竹座の紀海音による『心中二ツ腹帯』の方であり、また、少なくとも寛保以前においてはこの八

「百屋心中を題材とする浄瑠璃や歌舞伎は、もっぱら『心中二ッ腹帯』の系統を踏襲するものであったことがつきとめられている。<sup>(注3)</sup> それについてはさまざまな理由が考えられるが、半兵衛の造型、あるいは近松の『心中宵庚申』上之巻の問題などがこれまでに指摘されている。

本稿では、紀海音の『心中二ッ腹帯』とも比較検討しつつ、近松の『心中宵庚申』の価値付けを試みようとするものである。なお、作品本文の引用は、それぞれ『近松浄瑠璃集 上』（日本古典文学大系・岩波書店）、『紀海音全集』（海音研究会編・清水堂）を用いた。ただし、兩作品ともに適宜句読点を補い、また旧漢字も適宜新漢字に改めた。

一

『心中宵庚申』の評価がさほど芳しくないことの原因のひとつに、上之巻がこれに続く中之巻、また下之巻との間に構造的な連関性の薄いことがこれまでしばしば指摘されてきた。比較的最近の研究においても、たとえば白方勝氏の『近松浄瑠璃の研究』では「上巻の趣向や事件が以下の巻に展開することはない。（中略）いわば半兵衛の性格を提示するだけの巻になっていて、劇的構造に組み込まれていない。」と評されている。<sup>(注4)</sup> また、白倉一由氏の『近松世話悲劇

の研究』においても、浄瑠璃、歌舞伎の上演記録を検討し、「上之巻と中・下之巻とは内容的にかかわりが希薄であることを物語っているように思う。」<sup>(注5)</sup> としている。

これまでの研究でも概ねそうした評価がなされてきたのであるが、諏訪春雄氏は『近松世話浄瑠璃の研究』において、二つの理由からこの上之巻を「高く評価する」としている。<sup>(注6)</sup> そして、その理由の第一には、本篇の上巻が当時吉宗によって推し進められていた享保の改革への風刺、批判として機能したことをあげておられる。たしかに、氏の指摘するように浜松城主浅山殿の背後に吉宗を見るならば、あるいはまた、吉宗を透かし見ないまでも、しきりにそこで強調される「儉約」からも、そうした近松の批判精神を読み取ることは可能であろう。そして、そのことは確かにこの時期に近松によって書かれた『心中宵庚申』の上之巻の存在理由を説明することにはなる。しかし、だからといってただちにそのことが、劇全体の中での上之巻の構成的意味を解き明かすことにはならないのである。

もちろん、諏訪春雄氏も、高く評価することの二つ目の理由として、「性格の一貫性という点に注目して読めば、『心中宵庚申』は到底一級の傑作とはいいい切れない」としつつも、「そのときの語り手の気ままによる拡散や偶然こそが

語り物の本来の面白みであり、『心中宵庚申』上巻のおもしろみの過半もそこにある。」「浄瑠璃に登場する人物は、単独で自立し、完結するものではなく、他とのからみ合や相剋のダイナミックスのなかでその存在感を確かなものとするのである。」と、これを擁護する立場をとっている。この説もまた一応は首肯することはできるものの、やはり依然として消極的なものであり、必ずしも上之巻の価値を積極的に認めようとするものではないがたい。

さて、海音の『心中二ッ腹帯』においても、また近松の『心中宵庚申』でも、上之巻の舞台は遠州浜松であり、半兵衛のもととの出自もこの地の武士である。これは両者が実説に従ったためであるのか、あるいは近松が先行の海音の設定を踏襲したものであるのかは決定しがたいところである。先行研究では概ね実説に従ったものであろうとしているし、反証をあげることもできないので、ここでも従来の説に従っておくことにする。ただ、おそらくは遅れて執筆することになった近松が、海音の設定を強く意識したであろうことは想像に難くない。しかも、上之巻の他との連関性の弱さは『心中宵庚申』においてのみではなく、『心中二ッ腹帯』にもまたあてはまるのである。

『心中二ッ腹帯』では、半兵衛のもととは山脇半六であった

ものを半兵衛と改めたとし、しかも、第一段の後段でその理由を次のように説明して見せている。

長崎よりの客僧。けんざうすといふ相人。汝に刃の難有とひそかに殿へ伝へしよし。ことなふおどろき思召。御前に人なき折ふし某をまねきよせ。しかくの御咄天命とは云ひながら。陳中の打じにか忠義の為に相果は高名とも成べきが。たんりよの生まれ出頭の。あてこととがめ口論に討はたさんはむざん也。町人にして一命をつなげと有のおもき御意。

そして、これを受けて半兵衛の実父、山脇十蔵は「おや心何がさて我子の為」に半六を養子に出したのである。このように、ここでは半兵衛が今は町人として八百屋を営むことの経緯が押さえられていた。そしてこの故に半兵衛は「主君の御恩親のしひ、やうふゑ孝の三つの海」を背負うことになるのである。しかし、一方の近松においてはこうした理由付けは全くなされてはいない。ただ「様子有つて五歳の時大坂へ立越え。町人に奉公し商人の養子となり」と語られるだけであり、実父山脇三左衛門は十七年前にすでに亡くなっている。

近松が、少なくとも海音のように半兵衛が町人となったことこの理由や経緯を説明する労をとらなかつたことは、海

音の半兵衛との造型の違いにも関わると思われる。すなわち、海音の描く半兵衛像は、いまだ多分に武士的な氣質を残したものであるとして第一段に提示されている。たとえば、そのことは文中からは次のような箇所が指摘できる。

・身は町人をひげしても。どこやらぶしの花うつば八  
百やさするぞおしかりし。

・なりかたちこそ町人なれ。もと侍の世倅じやもの。  
かけて入てしんでくりよ。

・扱其方は云ふごとく。町人の氣になりぬいて。ぶし  
のはちは用ひぬな。

・ふつつと心を取なをし武道は口にも出すまじ。

後半の二つは形式的には否定的な形で語られてはいるものの、この段の半兵衛の口調とあいまって、彼が元は武士であったこと、そして今もなお、その氣風が抜けぬことを強調しているのである。もちろん、近松にあつてもそうした要素が見られるのも事実である。たとえば、「どこやら詞の引放、残る所が武士形質。」と語られるがごとくであるが、しかし、同時にまた、「魂は武士なれど。三十余年町人に業も姿も染付きし。」とも語られるのである。そして、何よりもこのことは、海音と近松のそれぞれが仕組んだ、半兵衛を巡るこの段の主要なエピソードにも如実に現れて

いる。

まず海音にあつては、弓の勝負をはぐらかされた半兵衛が、やわらの勝負において空之進を投げ捨てたことが契機となり、これに続く空之進の嘲笑、半兵衛の書置、そしてその封印へと展開してゆく。

一方の近松の描く半兵衛は、料理人として山の芋をたくみにさばき、また、弟の小七郎の念者を見ごとに選んで見せるのである。しかも、料理の場にあつては、せっかくの大芋を一寸足らずに切り碎いてしまったとの郷左衛門の非難に対し、「惣じて貴人大人へは。何に限らずかやうの珍しき物をお目に掛けぬが料理の習。大名高家は大様にて。一度お目に触れられては沢山有る物と思召し。」と、あくまでも料理人としての立場からこれに理詰めの反論を試みている。また、この巻のもうひとつのエピソードともいべきいわゆる衆道裁きの場においても、「此の道に高下はない。」として中間の小一兵衛に弟を託している。すなわち、形にとらわれることなく、本質を見極めるといった態度に徹しているのである。もつとも、小七郎に死装束をさせるなどは町人というよりは武士的な振る舞いと言ふべきかも知れないが。

それぞれの上巻に置かれたエピソードの意味を検討する

ならば、海音ではここで半兵衛の基本葛藤が提示されたということになる。すなわち半兵衛によって語られる次の条がそれである。

あつはれ山脇十藏と。誰におとらぬ武士の身を。半兵衛と云町人を子に持給ふゆへにより。いかいちじよくを見せまして面目なふて成ませぬ。なりかたちこそ町人なれ。もと侍の世倅じやもの。かけ入てしんでくりよ。イヤ／＼。それでは仁右衛門殿。よしないぶしの子をもらい。うきめを見るとくいうらみ。なげき給はんおいとしや。武士と町人二人の親。中に立たる半兵衛は。いづれへ孝を立べし。

ここに見られるように、半兵衛は武士と町人の二人の親への両立がたい「孝」の狭間に立つのである。ただし、この葛藤は半兵衛の書置きが封印されることによって、解消されるわけではないが、ともかく一旦は回避されることになる。「書置ひらくは死後の事。それをとちる大せつな命の門をかたむる封印」といった表現は、劇の後段への伏線として機能するのであり、また、近松が『冥途の飛脚』や、『心中天の網島』の上巻などにおいて試みた中止法に近い手法ともなっているのである。もつとも、ここでの書置の封印は「命の門をかたむる封印」とはいうものの、あくまで

半兵衛の武士としての体面を封印するものに他ならず、劇の本筋たるお千代の姑去りとは何の関わりも持ちえないのではあるが。

ところが、近松にあつては上之巻には半兵衛の抱える葛藤が一切見られないと言つても過言ではない。先の二つのエピソードに見られるごとく、いわば理詰めでありつつ、同時に情をもまた掬い取っている。まさしく、みごとなまでの半兵衛像を近松は描いて見せたのである。こうした点こそがまさしく、本篇において上之巻と中・下之巻との連関性の弱さを指摘される所以であろう。先にも引用したが、『心中二ツ腹帯』において半兵衛は「主君の御恩親のじひ。やうふへの孝の三つの海」を背負うが、近松では半兵衛の実父はすでに他界しており、したがつて半兵衛が背負うのは「やうふへ孝」のみである。しかも、それさえもこの上之巻ではまだ全く葛藤を生じさせるには至っていない。では、このことはどのようにとらえられるべきなのであるか。このことは、中・下之巻を検討した後に改めて考察することにした。

二

海音、近松ともに、上巻では遠州浜松、また下巻では大

坂新朝の八百屋内を舞台とし音選ばれているが、中之巻はそれぞれに場の設定が異なっていた。海音はなにわ津で、また近松では山城の上田村、すなわちお千代の実家で新たな物語が展開していくことになる。そして、そのことは単にそれぞれの趣向の違いにとどまらず、下之巻との関係における中之巻のあり方、あるいは半兵衛の抱える義理や苦悩との関わりという意味でも両者の違いは大きい。ここでは、それぞれの中之巻を検討していくことで近松の特質を見ていきたい。

『心中二ツ腹帯』第二は、なにわ津の船着場に幕を開けるが、折しもそこでは島原の遊女の欠落者の捜索が行われていた。しかも、お千代はそこで二度までも、その遊女に間違えられている。ここでは、お千代の美貌が強調されているのであるが、そのことはまた、町女房よりもむしろ遊女に見えかねないお千代像を観客の前に披露することでもあった。

- あれし軒ばに三ヶ月の。ひかりこぼる、ごとく也。
- 町方のお内儀にはばつとかうとな御風俗。
- きりやうはこなたの覚てなり。ちつとのおちめははでなれど。
- 女房は又当世ふう

冒頭だけではなく、第二を通して、お千代の当世風の風俗が繰り返して語られているのである。もちろん、このことは第三にも見られるように姑がお千代を忌避する理由付けのひとつにもなっており、たしかにこの方が観客を納得させやすいとはいえよう。<sup>(注7)</sup>ただし、この場面は浜松からの帰途にある半兵衛と、おぼとともに京から下ったお千代とが偶然この場で邂逅するという設定であり、演劇的な面白さとはかく、リアリティにおいて無理を生じていることも否めない。また、お千代が袂から文を落した場面でも半兵衛は、「勿体なくも母人を邪険な心と恨みしが。帰つてじひであつたよな。ひまを取かとおつたれどもふりよに逢てのまに合口。ま男の出合宿」とうろたえるなど、上巻で描かれていた武士の出自らしからぬところも見せている。

半兵衛の留守中に、姑去りにあうという設定は海音、近松ともに共通するが、海音では姑が直筆の去り状をお千代に渡しており、もはやこの段階で復縁の望みはきわめて薄いのである。さらには、半兵衛は「然らば今より日を切て五日が内にさつはりと。おちよを内ゑよびいれん」と自らを追い詰めていくのである。このように刻限を切ることは一般的に劇的緊張の高まりを志向するものである。しかし、ここでは残念ながら二人の行為には打開の可能性はなく、

したがってまた葛藤もこれ以上の深まりを見せることはなかった。

近松の中の巻は、山城の上田村に幕を開ける。このことは、海音には見られない近松独自の趣向であり、もっぱら平右衛門の娘に対する情愛を描いて見せることにその目的が置かれていたことは異論がなさそうである。そして、それは親としてきわめて自然な情愛であり、無条件にお千代にそそがれるものである。

また、選ばれた場以外にも、お千代の実家の貧富にも差が見られる。海音の描く（もつとも、その場面はないが）お千代の実家が貧家であるのに対して、近松のそれは「家富みて。庄屋に並ぶ萱屋根」の老百姓である。実家に戻れないお千代を描く必要からは、たとえば海音のように貧家といった設定には無理がない。しかし、近松はあえてそうせず、ここでは「三度の嫁入り」によってお千代を精神的に追い詰める道を選んでいる。

さて、お千代が、半兵衛の留守中に姑去りにあつたことは、先にも述べたごとく海音、近松に共通する。そして、この時やはり両者の描くお千代は、ともにそのことに對してなすすべを持っていない。したがって去られたお千代の思いは、八百屋の家に戻りたいというただ一点の願望に収

斂されており、またその実現のためには半兵衛にすぎるといふ以外の方法を持ちえなかつた。その意味では、ここでのお千代像はきわめて単純化されているといえるであろう。たとえば、父の平右衛門は一心にお千代に情愛をそそぐが、それに対して、お千代には双方向的な情愛をかえず余裕さえない。父が病に臥しているにもかかわらずである。半兵衛の「たとへ死んでも體も戻さぬ。未来まで女夫、」との言葉に「ア、忝い父様姉様も悦んで下さんせ」と自己自身の悦び以外はなにも目に入らないほどである。もつとも、そうした娘お千代の悦ぶ姿は平右衛門にとつては「悦ぶ顔を見る親の心の嬉しさ」を呼び起こすものであり、一方向的ではあるものの、そこに齟齬をきたすものではない。

平右衛門もまた、ある意味でお千代同様に単純化されている。彼はひとえに娘を思いやるばかりであり、彼にもまた何ら解決へ向けての行為をとりえない。したがって、ここにも葛藤が新たに發展していく余地は生まれてはこないのである。そればかりか、平右衛門は「養子の親に我が罪を塗付くる不幸者」、「養子に悪名難を付け。口、に取沙汰せば手柄、」と、半兵衛を理詰めで追い詰めていくのであるし、さらには「灰になつても帰るな」と、お千代をも

また、もはや死以外にはありえない窮地に追い込んでいくのである。平右衛門にはもちろん悪意はないが、それは畢竟、半兵衛、お千代の二人の抱える葛藤を、いよいよ抜き差しならないものへと自覚と覚悟を促していくものに他ならなかった。

このことは、半兵衛の側からも検証してみれば、なお一層明らかである。かつて半兵衛は、お千代の三度目の嫁入りに際して「千代は去らぬ氣遣いするな」と平右衛門と「互の契約」を交わしている。そして、それが半兵衛の主體的な意思であったことは「今こそ八百屋の半兵衛。元は遠州浜松にて山脇三左衛門が倅。武士冥利商冥利」からも明らかであろう。この時、半兵衛の養父母がこれをどのように受け止めたのかは描かれていないが、少なくともこの嫁入りを承認してははずである。つまり、お千代にとっては三度の嫁入りは、もはや実家へは戻れないという軛を科すが、他方、半兵衛および八百屋の養父母には、これ以降もこのことは問題とはなっていない。

姑による一方的な離縁は、半兵衛をして平右衛門とのこの契約の不履行を、すなわち「武士冥利商冥利」の義理を守れなくするのである。このことは、単に半兵衛の平右衛門に対する義理の問題にとどまらない。「我が罪を養親に塗

付くる不幸者」すなわち、養父への不孝といった、より上位の社会的な義理をも同時に欠くことになるのである。

平右衛門には、たとえば「我ら去りはいたさぬ」と「申分くる」ことは可能であった。そこに打開策が見出せるわけではないが、「情」においては互いに了解しえたからである。しかし、一方半兵衛がそうした誠意を尽そうとすればするほどに、そのことは養母に対しては「不孝の上塗」となるがゆえに、半兵衛はそうすることができない。<sup>（注）</sup>つまりこの葛藤の解決には出口がないのである。畢竟、半兵衛がここで選ぼうとしたのは「親仁様につがひし詞違へぬ武士の性根を見せる」ために脇差で自害をはかろうとすることであった。すなわち、武士としての自己破滅的で一方的な決済の方法である。しかし、これでは町人としての半兵衛の解決策にはなりえないばかりか、養母へのさらなる不義理となることをまたしても平右衛門に指摘され、断念せざるを得なくなる。この時もはや、半兵衛にはいかほどの解決の道も閉ざされていたのである。

『心中天の網島』において、上之巻の幕が上がった時、進退窮まった治兵衛と小春はまさに心中する直前であった。しかし、まさしくそこから劇が展開し、小春、おさんはそれぞれ上之巻、中之巻において自らの自己存在をかけた行

為によってドラマツルギーを作り出していった。ところが、『心中宵庚申』にあつては、こうした行為の可能性さえもが閉ざされているのである。自らの非を悟つた半兵衛の「ハアさうぢや誤つた眞平と。額を摺付け身を悔み。然らばお暇千代も同道いざお立ちやれ」は、解決に向かつての一步ではなく、なすすべもない破滅への道のりに他ならなかつたのである。

### 三

『心中二ツ腹帯』の第三では、半兵衛の葛藤解決の援助者として二人の人物が配されていた。養父仁右衛門とその甥の嘉兵衛である。

仁右衛門は七兵衛に促される形で、妻の説得を試みはするが、それは「孫をあひして遊ぶなら嫁のにくさもわすられん」と甚だしく積極性を欠くものであり、それならば出家するとの返答の前にさえないすすべもない。「いかにおちよにそひとふても母を坊主にやしられまい。かなわぬ事と思ひ切レ」というのが仁右衛門の結論であつた。

また、嘉兵衛による解決策とは次のようなものである。

世に心中もおほけれど銀につまるかあふことのならぬ  
せつばの時にこそ。八百やといへはかるけれど勝手と

もししい事はなし。上町辺に借家をかり行かよふてもあ  
い給へ。たとへ五貫目三貫目帳面あはぬ事あらば。嘉  
兵衛ひとり引負ておふたりの名は出すまい。命の替  
りに立たい

この提言は、二人の命を助けることにはなるが、お千代の姑去りが覆らないことを前提としたものであり、いわば消極的な当面の妥協策であるに過ぎないのである。しかも、この時すでに半兵衛には心中が決意されていたことにも注意しておく必要があるだろう。先の嘉兵衛の提言を受けた半兵衛は以下のように振舞つてゐるからである。

半兵衛心に思ふやう死ぬるといわ。此者が。付まとふ  
てはなれまじ。すかして此ばをのがれんと世に嬉しげ  
に打ゑみて。げにあふた子におしへられ。あさ瀬を渡  
ると云ごとく其方が異見にて。とやかく思ひくづおれ  
しもあらふたやうに打はれた。借家の事も内証も万端  
お主を頼み入。当分は先おや里多もどしておくがよい  
道理。女房嘉兵衛に礼いや

すなわち、第二で語られた「五日が内」には何の根拠も  
なく、その間半兵衛は何事をもなしえないまま、心中の決  
意へと傾斜していったのである。では、半兵衛のこの心中  
の決意は何を契機になされたのであろうか。第三にも、第

二にもそれを示すようなものは見当たらない。さすれば「五日の内」と語った時、もはやその当てのなさから心中を覚悟したとするほかないであらう。

なお、ここでも世間の義理は一応問われてはいる。仁右衛門が嘉兵衛を追い出そうとすることがそれであるし、半兵衛も「母のい、分一々に尤至極と思ふ故。ちよめは身共がさりました」と養母を立てている。ただ、もはや心中が決意されていたこの時、こうした行為はもはや新たな苦悩をさえ生み出さなかつたのである。

一方、『心中宵庚申』の下之巻では、半兵衛の苦悩と煩悶はまだ終わることはない。葛藤解決の道がすでに閉ざされていて、なお内面と体面のドラマが繰り広げられる余地を持っていた。半兵衛が「廿二の年から御面倒に預り。一人の甥御を差置き家屋敷商売とも。私へお譲りなさる、御厚恩」を捨てることができず、なんとかそれに報いようとする道を模索するからである。お千代も「此方さんの孝行の道さえ立てば」とこれを支持するのであり、半兵衛は最後の賭けに出る。「十六年此の方たった一度の御訴訟」がそれである。

美しう千代めをお入れなされ。その上にて私が。物の見事に去状書いて暇やります。(中略)千代めが姑への

恨もなくお前を慈悲ぢやといはせたい。

すなわち、姑去りを撤回し、千代に「慈悲ぢや」と言わせること、そしてそのことによって養母の体面を立てることが半兵衛のかるうじてなした孝行であった。たしかに家を出ていく前に千代は「お慈悲深い姑御」との言葉を発する。千代にとつても、観客にとつてもきわめてシニカルな響きを帯びていたではあるうが。この後間もなく心中死するだけに本質的には養母の体面が立つことはありえない。もはや形式に過ぎないと言えば、全くその通りであろう。

半兵衛は形式だけを守りつつ、「母殺すか女房去るか」の間に女房を入れ、母を殺したのである。「女房の親と我が親と世間の義理と恩愛と」——絶対に並び立たないこの命題に対する半兵衛の解答は、恩愛を取るものであった。すなわち、いかようにしてでも千代を嫁として死なせねばならなかつたのである。女夫心中することにこそ半兵衛は意味を求めようとしたのである。

井口洋氏の「『心中宵庚申』論」には、次のような注目すべき指摘がある。<sup>(注9)</sup>

それは、「家を去」つても「女夫」は「女夫」である、——つまり婚姻は「家」に基礎付けられなくても成立する、ということの、まことにいちはやき発見なので

あった。

つまり、「家」から脱落せねばならなかった二人が、はからずも「家」の論理を超越したところで、なおかつ「女夫」としての証を心中によって立てたということであろう。近松の世話浄瑠璃では、第一作の『曾根崎心中』においてすでに、死んでゆくお初、徳兵衛の二人には道行の場面では「夫婦」と語られていた。現世ではしよせん金に詰まった客と遊女の間柄でしかなかった二人であるが、近松はあくまで夫婦として死なせることで来世での二人の救済を希求したのであろう。

本篇の半兵衛、お千代はもとどが夫婦である。「家」の構造の中から「去られ」たお千代を再び「女夫」として死なせることにこそ、半兵衛の、そして近松の希求と、そして同時に諦観とが見て取れるであろう。

#### 四

これまで各段ごとに海音の『心中ニツ腹帯』と比較しながら、『心中宵庚申』の特質を考察してきた。最後に全体像を振り返ることで本稿のまとめとしたい。

『心中宵庚申』は、これまでに再三にわたって上之巻の他の連関性のなさが指摘されてきた。上之巻が、遠州浜松

での半兵衛の行為だけを描いているために、たしかにもっともな見解ではあろう。しかし、ここで展開される半兵衛像をトータルに捉えたとすれば、その構成はかならずしも不備とは言いがたい側面も持っている。

上之巻で半兵衛は料理人として、また衆道さばきの場においても見事なまでの裁量と機知を見せる。その同じ半兵衛が、今は家督を譲り受けているにもかかわらず、自らのこととなると全く解決の方法を示せない。結果的にはお千代を死なせ、養父母の体面を地に落としてしまっているのである。そうした半兵衛像は、一見たしかに矛盾しているようにも見えるだろう。しかし、この矛盾は、はたして一個の人格の中に共存しえない矛盾であろうか。仮に義理の問題を除外したとしても、養母の姑去りに対して何をなしているであろうか。果てしない困惑の中に置かれる半兵衛の姿は、むしろ強いリアリティをこそ持つのではないだろうか。半兵衛の養母はひたすらに後世を願う寺狂いに明け暮れる。「此の世からの生佛とはおれが事」、「ほんの如來が見たくばおれぢやと思や」というのが、これといった理由もなく一方的に姑去りをする彼女の自己認識である。この背反する矛盾を彼女は一つの人格の中に統合していたのである。

近松は晩年において、そうした単純化されない、むしろ矛盾に満ちた存在としての人間観に至ったと考えたい。

注1 なお、竹本座の初演と同日には京都の嵐座で『生霊紅毛氈』が初演されていることが、これまでに諸書で指摘されている。

注2 横山正一『「心中ニツ腹帯」 「心中宵庚申」の流転』

『学大國文』二十一号。昭和四十三年二月

注3 前掲『「心中ニツ腹帯」 「心中宵庚申」の流転』

注4 白方勝『近松浄瑠璃の研究』風間書房。平成五年九月。

注5 白倉一由『近松世話悲劇の研究』おうふう。平成八年四月。

注6 諏訪春雄『近松世話浄瑠璃の研究』

注7 先掲『近松浄瑠璃の研究』にこの指摘が見られる。

注8 先掲『近松浄瑠璃の研究』では、「この情は女房の親への義理とは共存しえるが、我が親への義理とは共存しえない」としている。

注9 井口洋『「心中宵庚申」論』（『近松世話浄瑠璃論』所収。和泉書院）昭和六十一年三月